

亂ヲ訴フルニ至ルベシ。コレガ解決ノ鍵ハ「アルノミ、則チ國際補助語」エスベラント」ノ採用コレナリ。此ノ語ハ各種國際會議ニ於テ既ニソノ卓越セル便益ヲ示セルハ勿論、醫學諸會議ニアリテモ屢々用キラレタルハ通ネク人ノ知ル所ナリ。將來我國ニ開催サルベキ國際醫學會議ニ於テ「エスベラント」ノ専用ヲ決セバ用語ノ紛糾ヲ絶對ニ防止シ、且斯ノ語ノ中立性ハ優ニ我が體面ヲ害ハザルノミナラズ、我ノ勸告ニ依リ西歐諸國ノ學者ハ快ク該語ノ使用ヲ承諾スベシ。然ラバ會議ハ實ニ一種ノ言語ニテ終始ス、コレ各國醫學者ノ平等ト協調ヲ持スル最捷徑ニシテ、又我國自ラテ救フ所以ナリト信ズ。想フニ醫學ハ人類ノ醫學ニシテ世界同學者ノ一致協力ヲ俟ツヤ最モ甚シ。之ガ實行ニハ「エスベラント」ヲ用キテ研究ノ交換ト會議ノ開催トヲ決スルニアリ。然ラバ世界各國ハ言語上ノ屈辱ト壓迫ヲ免レ、平等ノ中ニ自覺アル言論ヲ吐キ得ベシ。コレヲ主唱シ勸告スルニ我が日本ハ最モ都合ヨキ位置ニ立テリ。庶幾クハ來ル大正十四年シンガポールニ開カルル第六回極東熱帶病學會、大正十五年東京ニ催サルル汎太平洋學術會議及ビ大正十六年東京ニ舉行サルベキ萬國醫學大會等ニ於テ、切ニ「エスベラント」語ノ専用ヲ希望シ、以テ當局各位ノ考查ヲ俟ツ。(完)

岡山醫學會彙報

岡山醫學會通常會

同會は岡山醫科大學集談會と合同し本月二十日午後三時より同大學附屬醫院臨牀講義室に於て開會す藤田會長開會を報じ直ちに左の演説に移る

第一席 生殖器末梢神經裝置殊に其の發育に就て

醫學士 大森 大亮 君

本演説は追て本誌に掲載すへし。

第二席 ニツノ小實驗

ドクトル 松波 哭太郎 君

第一例 患者 農婦 吉〇ツ〇 三十年。

一箇月程以前より漸次左側頸部胸鎖乳頭筋に沿て疼痛あり次第に痛みを増し腫脹を來たし現在は外觀上化膿せるが如き狀況を呈す、依て胸鎖乳頭筋炎の診斷に於て切開を試む然るに更に膿を見ず筋肉の痙攣状態にあるのみ之を精檢するに偶然此處に示すが如き異物の筋肉實質中に硬く閉ぢらるゝを發見せり異物を取り縫合するによく第一期癒合にて全治せり之に由て全く異物の刺戟に由るものなることを

立證せり。

之に由て既往に遡り患者の記憶を回想せしむるに長き以前に朝食時卒然咽頭に痛みを起し左側に魚の骨のかゝりたるが如き感を起す翌日に至るも痛みを去らざるが爲に醫師の診察を受けたるに何等の異常を認めずとのこと且強き痛にあらされは放過すること數日にして知らず／＼に治癒せり之と頸部の疼痛との間の日數に就て尋るも農家のもの低級のものにて残念なれ共確答を得ず想像するに二箇月もありたるものゝ様に思はる。

之に由て考ふるに農家に於て麥の穂の食物中に混することば常事のことなり嘗て咽痛を感じたるとき扁桃腺を經て粘膜下に進み長き経過を取て筋肉中に達したるものならん此處に考ふ可きは此の如き纖弱なる尖端なき異物が如何にして強き筋膜を破り筋實質中に達したるものかの點なり。

第二例 患者 商婦 大〇ヤ〇 六十五年。

初發六箇月程以前にして子宮癌と思考せらる可き自覺症を訴ふ或る病院其他二人の専門科醫師の診断によるに凡て皆子宮癌に決定せられたる由につき最後の診定を余に乞はれたり。

内診するに外觀上子宮腔部の潰瘍面によりて及出血其他

の自覺症により子宮癌と思はる可き狀況にありと雖も其他に首肯し難き點あるに付一部を取り檢鏡するに癌組織を全く認めず由て一箇月を放置するに何等著しき進行狀態を認めず再び一部線部を取りて再び顯微鏡的検査をなすに癌組織全く無し「バヒローム」と決定す。

檢鏡検査に付ては恩師田村教授の校閲を受けしことを謹て謝す。

「バヒローム」を癌腫と稱して手術するや其成績の良好なること申す迄もなし乍併他方に於ては物質的竝に精神的に患者に與へる損害や大なり尙ほ學問界に於て癌腫の治療成績を知らんとするに當り誤りを與ふること其罪や大なりと曰はざるを得ず。

第三席 「チフスワクチン」注射に因る大人性

胸腺死の一例

安藤守元君

君の講演は本誌次號に掲載すへし。
右終りて午後五時四十分閉會す。